

## 論文要旨

### 論文題目

地域共同体における祭祀空間の変遷に関する研究

—沖繩における神アサギ・トゥンを事例として—

本研究の目的は、伝統的な祭祀空間がどのような変遷を経るかについて共同体の変化との相関関係を明らかにするものである。本研究の射程となる祭祀空間とは、寺社の境内のような豁然と区画された空間ではなく、いうなれば世俗の混在する曖昧な空間である。一つの例であるが、路傍に佇む地蔵の周辺が祭祀空間であるか、非祭祀空間であるのか見極めが困難であるような、人が集って住む共同体において、しばしば散見する曖昧な祭祀空間を研究対象とする。そのような祭祀空間は、大きな権威となり、又は権力を持たずとも、聖俗の微妙なバランス、若しくは拮抗の中でなぜ残されてきたのか。沖繩に現存する神アサギ・トゥン空間の変遷を辿りながら、集落との関係について明らかにすることを試みる。

神アサギ・トゥンに関する研究に対して建築学の貢献は多くはない。僅かに池浩三氏による奄美大島・加計呂麻島・伊是名島・伊平屋島を対象とした研究があるのみである。近年、伊従勉氏によるトゥンを中心とした論考もあるが、民俗学的なアプローチであり、『琉球国由来記』『琉球国旧記』等のテキストに依拠するものである。残念なことに、現存する神アサギ・トゥン空間のサンプルを可能な限り収集し、実態を基にした研究は皆無と述べても過言ではない。それゆえ、本研究においては、現時点で把握しうる、沖繩等に現存するすべての神アサギ・トゥン空間の現地調査を行い、その悉皆調査によって得られたデータを考察の対象とする。

考察より以下の結論を導いた。沖繩における神アサギとトゥンは、始原において、同じ性質と機能を有していたと考えられる。その空間は、祭祀施設であるとともに、非祭祀的機能をも併せ持ち、集落民にとって不可欠の存在であった。にもかかわらず、現存する神アサギ・トゥンは大きく変容している。北部では伝統的な形態を継承する形態として存続する傾向が見られるのに対して、南部では、例えば祠のように、伝統的な形態から逸脱した形態として在る傾向が強いという差異が顕著である。その形態変遷の原因が祭祀内容の変質やプロセスの変化によるものとの確証は遂に得られなかったことから、よりマクロな視点に立ち、経済構造、人口（動態）、沖繩戦、それぞれを変質の要因として検討するに及んだ。いずれも深い相関関係が認められたが、とりわけ沖繩戦による人的・物的資源の損壊こそが直接・間接の端緒であることが強く示唆される。建築は社会の一部であり、これと切り離して建築史研究の構築はあり得ない。また、神アサギ・トゥン空間に現代的なコミュニティ施設を併存させ、集落のコアとなる公共空間として活用する手法が北部地域に顕著に見られたが、それは今までの古くからの共同体構成員にとってのみ意味のある空間からの変容であった。すなわち、誰もを容れ、包み、内とも外ともつながるといった要素を持つ空間へ神アサギ・トゥン空間が変容したのである。これはまた祭祀空間などの伝統的空間の今後の在り方について有用なモデルとなる可能性を見いだすものであった。

以上

氏名 森下 一成

(様式第5-2)

年 月 日

琉球大学大学院  
理工学研究科長 殿

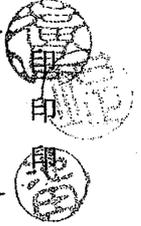
論文審査委員

主査 氏 名

副査 氏 名

副査 氏 名

福島駿介  
堤龍一郎  
池田孝之



### 学位（博士）論文審査及び最終試験の終了報告書

学位（博士）の申請に対し、学位論文の審査及び最終試験を終了したので、下記のとおり報告します。

記

申請者	1) 専攻名 総合知能工学 氏名 森下一成 学籍番号 [REDACTED]	
指導教員	福 島 駿 介	
成績評価	学位論文 (合格) 不合格	最終試験 (合格) 不合格
論文題目	1) 地域共同体における祭祀空間の変遷に関する研究 -沖縄における神アサギ・タウンを事例として-	
審査要旨 (2000字以内)		
<p>古来人が集住する集落と祭祀機能を有する空間とは不可分といってもよく、集落の発展とともに祭祀空間もその姿を変えていくものである。すなわち、祭祀機能が固定化し、祭祀にのみ使われるものから、公共的な空間としての性格を強めるもの、あるいは集落の発展とは裏腹に消滅していく空間など、その姿は多様である。沖縄には聖地としてのウタキ・聖俗の境界としての神アサギ・タウンが集落の根幹をなす空間と考えられてきた。</p>		

神アサギ・トゥンは近代以前に成立した集落に多く見られ、沖縄本島以外の周辺諸島にも存在している。祭政一致による支配を指向した琉球王朝の支配地域において、祭祀に特化されない多岐にわたる機能を有した重要なものであったにもかかわらず、これまで建築学からの研究は多くなされておらず、多くは民俗学・歴史学の視点に立脚したものが主であった。また、先行研究の多くは一部の地域のみ神アサギ・トゥンを対象としている嫌いがある。本研究は、現存する神アサギ・トゥンのすべてを踏査して、その本質を探るものである。

沖縄本島における神アサギ・トゥンの悉皆調査をした上で、以下のような分析がなされうる。

形態・意匠から、神アサギ・トゥンを「伝統型」と「非伝統型」に分け、伝統型は「穴屋型」と「差屋型」と「伏屋型」とに分かれ、非伝統型は「伝承型」と「非伝承型」に分かれる。「非伝承型」はさらに、「開放型」と「閉鎖型」と「社殿型」と「祠型」とに分類される。また、伝統型・非伝統型とは別に、空間としての「場」と他の拝所と併せた「合祀所」に類されるものもある。

神アサギとトゥンは、同一であるか否かについて議論があるが、調査の成果から、両者は始原においては同一のもので、様々な要因によって現在のような異なる姿を呈している、という結論を導いた。また、これまでの研究と相矛盾する事例も多数発見され、先行研究に対する批判的な考察も試みている。

現在確認された神アサギ・トゥンの形態・意匠については以下のようなことが明らかになった。すなわち、伝統的神アサギ・トゥンは当初の寸法体系を踏襲している。伝統的な神アサギ・トゥンが柱と屋根のみで構成されていたのに対し、現在は壁を持つもの、祠のようになったものなどが確認された。壁を持つようになった神アサギ・トゥンは長方形平面となり、正面と奥行と軒高において大型化していることが確認された。祠型は特に南部のトゥンに多い。

集落における神アサギ・トゥンの位置は一様ではない。神アサギ・トゥンの集落との位置関係を、「集落内包型」と「集落内縁型」と「結節型」と「ウタキ内包型」に分類した。また、特に集落内に位置する場合、集落の重要な施設と併存することが少なく

ないため、各神アサギ・タウンの周辺にある祭祀施設と非祭祀施設について検討を加え、神アサギ・タウンにおける祭祀のための空間が集落のコモンスペースとして、この空間を用いる傾向があることを指摘した。

本来同一のものであったと想像される神アサギ・タウンは、現代において著しい地域的差異を表している。その差異が生じる原因について、人口動態、産業構造の変化、沖縄戦や米軍用地への収容などの社会変動を仮説として提示し、検討を試みた。神アサギ・タウン及びその空間の変容に表れる集落共同体の変化について、事例を用いつつ考察した結果、集落共同体が共同体としての祭祀を完全に放棄することによって神アサギ・タウン空間が消滅するか、祭祀目的に特化させて「神社」と化すか、非祭祀施設を空間に取り入れるなどの工夫によって神アサギ・タウン空間の始原の姿を保持または取り戻すか、という3つの方向性が共同体の変化によって表れていることを指摘した。地域差は仮説とした3つの要因が複合的に絡み合っ生じるのだと思われる。

以上のように、304件にも及ぶ神アサギ・タウンに対する悉皆調査は、それだけで大いなる研究成果といえるが、その分析にとどまらず、現代の多様な神アサギ・タウンの状況の背景を丹念に追い、かつ一定の説得力を持ち得たことは特筆に値する。今後は周辺諸島との比較研究によって、琉球の集落における公共空間の姿が明瞭になるであろうし、地域共同体構造の研究・公共空間計画の基礎研究として大いに参考にされることが期待される。

本申請学位論文については、本審査委員会において資格要件及び論文内容について慎重な審議を行った。さらに約17名の参加を得て開かれた最終試験としての公聴会においても、本論文で得た成果の有効性、応用性と社会的位置づけ、意義をよく理解し、質疑応答も活発、的確であった。以上本研究論文を本大学院理工学研究科総合知能工学専攻における工学博士の学位論文としての十分な価値を認めるものである。